

子供たちが、先日作った巨大なかまくらも、とうとう昨日崩れ始めました。急速に雪解けが進んでいる証拠です。2月中旬の2週連続の週末の大雪が嘘のように、めっきり春めいてきたこの頃です。でも、その大雪のお蔭で、大地周辺ではたっぴりと雪遊びが、まだまだ続けることができそうです。

子ども達の雪焼けの顔がまぶしく、それだけ雪で遊んでる証拠でしょう。外では、クロカン、そり遊び、雪遊びこの繰り返しです。今年のクロカンは、バックカントリーと称し、雄飛君があちこちわざわざ大変な場所へ冒険しに出かけています。そり遊びは、大地に入ってくる道の右側の雑木林から、そり遊びの歓声が聞こえて来ることが多いです。雪遊びは、大地裏やあみあみ広場東側の斜面がホームグラウンド。どれもが共通しているのは、決して平坦な場所ではなく、傾斜、狭い場所、うっそうとしている所です。たださえ、雪があれば楽しいのに、傾斜地でしたら、更にその魅力はパワーアップします。もちろん、それだけ体力も備わります。

「野球は、冬うまくなり、スキーは夏うまくなる」と言われています。「一冬越すと、身体が一回り大きくなる」と高校球児が言われるように、大地の子供も、一冬越すと、更にパワーアップすること間違いのないことでしょう。それは、顔の黒さが物語っています。

まだまだたっぷり恵まれた雪があります。春は、もちろん待ち焦がれますが、やはりまだまだ雪を満喫していきたいと思っています。



【バックカントリー】

予想外に、靱帯の損傷が長引き、(たぶん、スキーをやるごとに、せつかく回復したものがリセットされるのでしょう)、このままではシーズンが終わってしまうという事で、新調したバックカントリースキーに挑み始めた2月。最初は、新雪を滑るだけの楽しみ(ゲレンデにはない自然の滑りの魅力)を満喫しようと始めたのですが。

2月の初めに、初めてシールをつけて、菅平の根子岳に登りました。登りながら見た神秘的な雪山、光景、その世界に驚嘆しました。シールを付けたスキーの楽しさ、楽しさ、歩きやすさ、それが、どんどんと頂上へ、雪の世界へ導いてくれるのです。歩くごとに、高度が進み、面白いように頂上が近づくのです。と言っても、一歩一歩歩くことは、夏山と変わりありませんが、もちろん、頂上へ着いた時の感動、景色、自分の汗は最高のご褒美です。そして、この後、違うのは、歩いて下るのではなく、スキーで下る、つまり歩くことはなく、滑って下りれるという事です。これを考えるだけでも、時間、体力など、楽しみが10倍深まります。それも、誰も滑っていない場所を独り占めできるからです。

2月中旬には、夢のたねで、大人の皆さんは同じく根子岳に登り、子どもたちは雪上車で青ちゃんが同行して登りました。雪上車の中から、大人たちがスキーで、スキーやスノーボードを担いで登る光景を見ることができました。本人たちは必死だったでしょうが、とても輝き雪山の溶け込んで美しい姿でした。誰もが笑顔で手を振ってくれています。羨ましい光景でした。自然の何もない雪山に、点のように人が歩いて登っていく姿、一歩一歩ですが、確実に登っていく姿、見ているだけで、熱くなるものがあります。

登りに約3時間、これだけ必死に登っても、下りは、20分。この違いが素晴らしいです。この20分のために、再び登って、もう一度滑ってくるのが、バックカントリーの王道のようです。長男たちは、バックカントリーに行くごとに、これを繰り返しているようです。この一瞬の滑りのためにやるのだったら、ヘリコプターなどで山の頂上へ行って、誰もいない場所を満喫すればいいのですが、そうではなく、時間をかけて登り、この一瞬を味わい、繰り返し登る。これこそが、バックカントリーの醍醐味なのでしょう。当初は、ただ誰も滑っていないパウダーを滑る楽しみだけだと思っていましたが、実は、この登りにすごい魅力があることに気づきました。

「自分の歩いた分だけ、歩いて登った距離だけ滑ってくる。これがスキーの原点であり、醍醐味だね」と長男がよく言っています。そして「小さい頃にスキーを始めても、その後の選択肢は、時間を争う競技スキーに行くことにほとんど限られる中、俺は、バックカントリーのように、自由に雪山を滑り降りるスキーの楽しみもある選択肢を提供し、普及していきたい」と話しています。確かにその通りだと思います。外国人や大人たちは、確かにそれに気づいてきたようです。最近、とても多くバックカントリーの人たちに出会いますし、スノーボードの若い兄ちゃんたちも、汗を必死にかきながら、本格的に雪山登山装備で登っている人たちに出会います。皆、いい顔をしています。

確かに、下り終えて自分の滑ってきたシュプールを見上げた時は、表現しようのない感動を覚えます。自分の人生の軌跡を確認するようです。長い時間かけて登った頂上から、自分の足元まで続いているシュプール。この足で登り、この足で下ってくる、それも何もない自然の雪山の中で。まさに、自分の存在を世界で、宇宙で、かけがえのない自分があるその生きている瞬間を味わえる至福の時なのです。険しい山の頂上に、自分の足で歩いて登ると、ロープウェイやヘリで登るのでは、全然感動が違うのと同様、夏山とは違い、更に神秘的で幻想的な冬山の頂上に、自分の足で登り、更に下りはスキーで楽しみながら下ってこれるバックカントリーは、本当に感動的です。

今年は、子ども達からも「バックカントリー。バックカントリー」とクロカンをしている時もよく聞こえてきます。林や坂道など難しそうな場所を見つければ「バックカントリー」と叫んでいます。本能的に、バックカントリー=困難な乗り越える場所と感じているようです。そんな気持ちを確かめようと、先日、年長児を連れて、大地から三水第2小学校(パンヤのきなりさんのある場所)目指して、直線方向で山越え、谷越え、リンゴ畑 土手 田んぼ、雑木林 小川 ありとあらゆる所を越えて、全員汗と一部涙に溢れながら、たどり着きました。雄飛も、「これぞバックカントリー(裏の野山を歩く)」と大興奮していました。翌日は、年長児の証書の紙漉きでも、同じように土手や田んぼを越え、最後は、川の中をスキーで歩き、水に埋まりびしょびしょになりながらも、元気いっぱいバックカントリーを楽しみました。

「自分の歩いた距離だけ自分で滑るご褒美がある、そのために、物や他人に頼らず、自分ではじめをつける、その充足感を求めて、自分で始末する・・・そこにすごい感動がある」なんてことは、子ども達には、理解させようとは思いませんが、本能的に、子どもたちは、クロカンでもアルペンでも、すごい場所や起伏のある場所、誰もいない場所や冒険心くすぐる場所で遊ぶことが大好きです。アルペンでリフトで同じ場所を何度も滑りおいても、ジェットコースターのようなスピードとスリルには面白いと言いますが、クロカンで道なき道を必死に歩きとおしてきた後、「すごい面白かった」と言う時の子どもたちの表現は、やはり断然違います。心を震わせて興奮していることがわかります。

自然と一体化して、自然の脅威を学び、自然に畏敬の念を持って、謙虚に楽しむ、そして非効率的にスキーを楽しむというバックカントリー、大地の暮らし生活の延長線上に、それがあのような気がします。雄飛の選択肢を選んでくれる子ども達がこれからはどんどん増えてくれればうれしいですね。